

平成 21 年度文部科学省委託事業

総合的な放課後対策推進のための調査研究事業報告書

放課後活動支援モデル事業報告書

「アグリサイエンス子ども教室」モデルづくり

滴水の会実行委員会

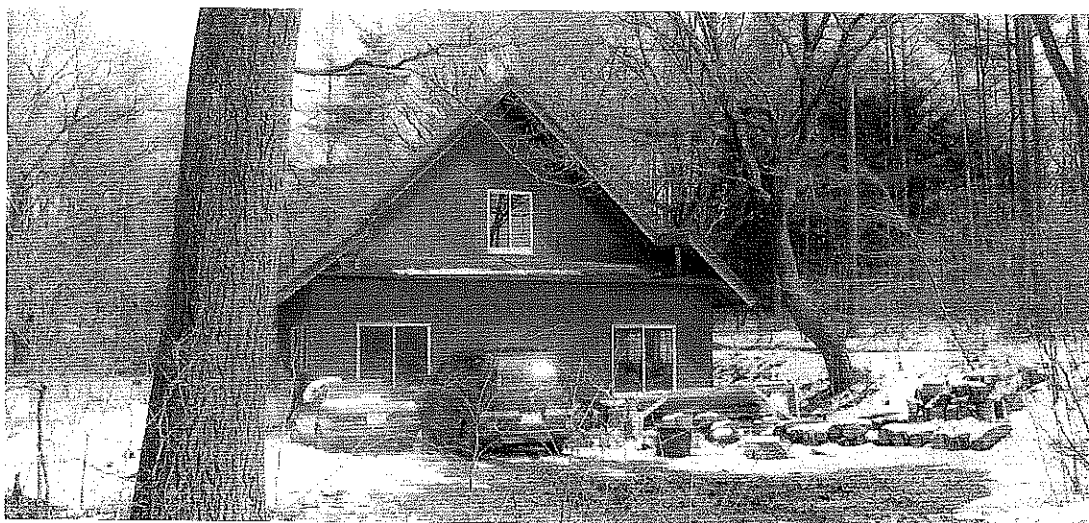
「アグリサイエンス放課後子ども教室」

○実施団体 : 滴水の会 (中心メンバー13名)

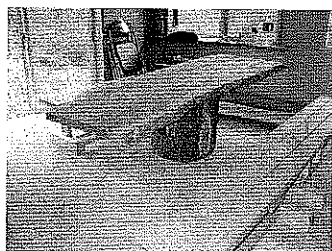
小諸市7名、佐久市2名、飯田市2名、東京都5名

○施設所在地 : 長野県小諸市桑山・佐久市桑山

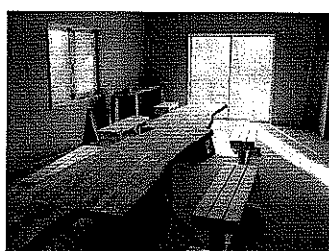
体験施設 山小屋



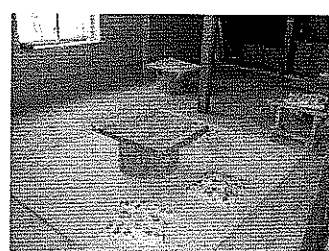
1階 (相談室)



(多目的室)



2階 (憩いの部屋)



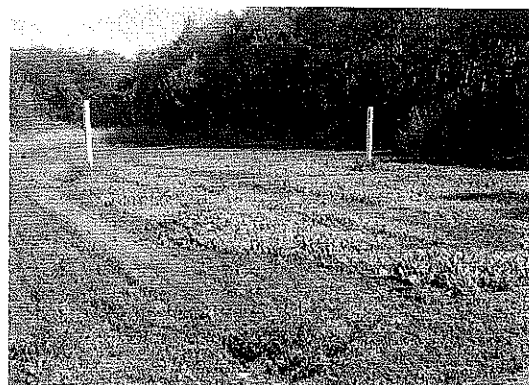
作業小屋、畜舎、送迎用車両



体験用畑（大根・白菜 生育中）



畑 40 アール：1200 坪（ナノハナ生育中）



○活動範囲 長野県・首都圏

○会議及び放課後教室開催回数等

【事業趣旨説明会】

県 生涯学習課及び教学指導課：各 2 回（県に期待する役割について）

市：2 回（行政との連携について）

保護者、オブザーバー：3 回

（作業における身支度及び発着時間の厳守・健康チェック等について）

【企画検討会議】 2 回

年間スケジュール企画検討会

事業実施上の注意点（特に不登校・ひきこもり・非行の児童生徒の扱い方）

家庭において共通の作業及び話題づくりについて（特に小学生家庭）

【実行委員会】

第 1 回 6 月 14 日 事業内容企画とスケジュール表作成（委員 8 名、オブザーバー 2 名、保護者 2 名）

第 2 回 7 月 26 日 夏休みの過ごし方、宿泊体験について（委員 8 名、保護者 7 名、オブザーバー 2 名）

第 3 回 8 月 30 日 8 月の反省会（委員 8 名、オブザーバー 2 名、保護者 3 名）

第 4 回 10 月 4 日 自然との共生、インフルエンザによる日程変更、事業検証（委員 8 名）

第 5 回 11 月 29 日 地元産食材の安全性について（委員 8 名、保護者 4 名）

第 6 回 12 月 27 日 インフルエンザによる日程変更等について（委員 8 名、オブザーバー 2 名、保護者 5 名）

【農林作業体験指導】

《 重点的指導内容 》

学校や社会になじめない児童生徒を対象に、農林作業によって五感を鍛えることに重点を置いた。

- 1、非行・不登校児童生徒は、特に身体を使う農林作業体験指導
- 2、引きこもり生徒や養護学校においては、個性を伸ばし卒業後の就業につなぐ指導
- 3、ニートの就労相談と社会訓練(社会奉仕と人付き合い)指導

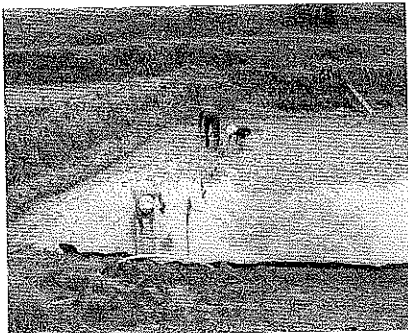
農林作業体験においてはこれまで一過性体験が多かったが、播種から手入れ、「収穫して食べる」までの一連の農業体験が可能な親子を選び実施。親も子も、将来の目的が何であるかはっきりしているケースは少ない。この問題の打開策として「頭より身体が疲れる作業」を続けることが非常に有効で、青少年にとって特に大切な経験である。実際の作業では、汗だくでも「止め」というまで作業を続ける生徒がほとんどである。休憩の時の水や作業終了後の食事の美味さが格別なことを体験する。そして辛抱して作業し成し遂げた爽快さと満足感を味わう。こういった体験の積み重ねの中から、それぞれが何かに目覚め、目指すべき目的を見出す。特に、非行・不登校児童生徒は皆、人の役に立ちたいとの願望を強く持っている。指導者や仲間たちとの作業体験の中から人や社会の役に立てる喜びを感じ、これをきっかけに立ち直る生徒は多い。

〔水田：田植え・稲刈り・収穫等の体験〕

田植えから精米して食べる米になるまでの通年体験できる家族に実施。

土と水に親しみ、用水と田んぼに生息する昆虫や魚類等についても興味を広げ、楽しみながら、また叱られながら、親と一緒に自分たちで作った米を味わうところまでやり遂げた。米作りの大変さはやがて身になる。

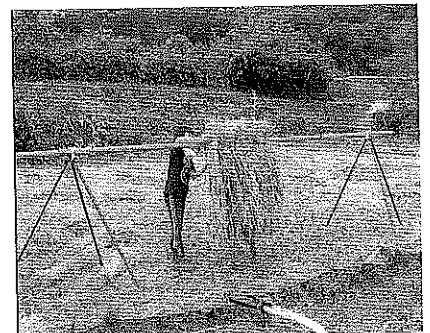
田植え体験



稲刈り体験



はぜかけ体験



〔野菜作り〕

夏・秋野菜の播種と苗移植から、間引き、収穫、料理・食事会を行い、安全な食物は健全な土からできることの意味を教えた。

〔ナノハナ栽培〕 40アールの畑に播種をした。

秋に播種を行い、22年4月につぼみ菜を間引き学校給食用に利用の予定。開花期には児童生徒たちの遊びと癒しの場所となる。種子は約400キロ収穫予定。菜種油として生徒が搾油しメーカーの協力でブレンドした上で養護学校ブランド商品とする計画。卒業後の就業につなげるための実証実験とする。このナノハナ畑が、生育と種子の収穫・搾油・製品になるまでにおいて児童生徒や若者たちに与える効果は何か、今から期待している。

(ナノハナ畑耕起中)



〔林業体験〕

ほとんどの子どもは、まずは木に触れたり登ったり、ツルでブランコをしたり、切り無く遊ぶ、自然とのふれあいを求めていることの現れである。

技術の習得には時間がかかる。伐採や枝打ちは危険を伴う作業であることを教え、主として力の要る下草刈りや丸太運びや丸太切り、子どもが興味を示すシイタケ用ホダ木作り(200本)を実施した。以後、日頃の手入れは養護学校にて継続して行う。

【「自然と環境」指導】

山林・樹木の種類・林と川の互惠・木の果たす役割・山の土の保水力・山の動植物や昆虫の生態等について散策や作業から学び、ヤママユ・野鳥の巣などを見つけて、探究心に目覚め、林の持つぬくもりを知る体験を実施。

子どもの目は良く、とんでもなく高い木の上の昆虫や物を見つける。このような体験を重ねることによって、人間本来の五感の働きが鋭くなる。



【創作指導】

自然の山では子供たちの個性がよく現れる。ドングリ・木のツル・小枝・草・キノコ等何にでも興味を持つ子どもは多い。指導者と一緒に小物作り・花台・本立て・巣箱・犬小屋の工作および写真・絵画等でそれぞれ楽しんでいる。自由な発想で作業に熱中して作る仕上がりは、それぞれに面白い。特に、非行・不登校生徒の作品には秀でていたものもある。皆喜んで持ち帰る。

【健康管理指導】

新型インフルエンザ流行の為、参加者家族・学校との連絡を密にした。学級及び学校閉鎖の対象にある子供たちについては、医師の助言を得て、受け入れに少数グループを多くすることにした。従来と違い、体温計測・マスク着用・水分補給・着替え・消毒と気を配る指導は大変であった。養護学校生徒については、体験学習の計画を訪問指導・参観に切り替え、中等・高等部の子供たちの卒業後に役立つ作業体験とした（文集参照）。首都圏及び県内外からの来訪も、感染防止のため、列車・大型バスでの参加を取り止め、小グループと家族に切り替えた。これからは危機管理計画が必要であると実感した。

【安全安心見廻り】

今年度は、インフルエンザ対策で市内総合病院・各医院との連絡や医療相談に追われた。見廻りも子供たちが集まる祭り場・ゲームセンター・駅前等に多く出向き、インフルエンザに注意をはらう見廻りとなった。祭りの日の夜中、駅周辺にたむろしている若者

十数人を自宅に連れてきて夕食後、不平不満等を聞いてやって数時間休ませ、朝食をとらせて返したこともあった。無職の若者たちである。この若者たちには、気持ちを汲んで個性を伸ばす指導さえすれば自立能力はある。次年度指導を予定している。

【読書・文集指導】

○読書会

長雨が続いた日には、山小屋の室内での読書や絵を書くなど自由な癒しの時を過ごした。蔵書は小学生から大人までの年齢層に応じて150冊ほどある。参加した子供たちが育った頃のアニメ音楽を、ボリュームを上げて流すと一齐に二階の『憩いの部屋』に上がって来る。多雨の時は室内、小雨なら外で遊び、晴れば樹木の下と、皆思い思いの場所で本を読んだり散策したりしている。そしてスタッフとの雑談の中から子供達は自分を取り戻して個性が見えてくる。こういう場所で過ごせる時間が今の青少年にはもっと欲しい。

○文集づくり

内容は、今年度事業参加の保護者・若者・教育関係者・スタッフ等の投稿と、養護学校の子どもたちの創作プロセスと、完成作品などの写真である。

【講演会・講習会】

○講演会

保護者講演会『子供の深層心理』では、「客観的に子供を見る」ことの大切さを親たちに示すことから始めた。子供たちはスタッフと一緒に山の散策から始めて農作業に移る。スタッフたちはやって見せたり、座り込んで説明したり。こういった時間の中で子供たちは熱中してくる。この間約2時間。子供たちの自然な笑顔や、楽しそうに作業する様子を親が客観的に見て、日頃親の前で見せない（こういう環境の中でのみ見られる）我が子の本来の姿（明るく元気で素直で思いやりがある）に気付いてもらうことがこの講演会の目的であった。多くの親たちが日頃の我が子との違いに驚いていた。

○講習会 「自然との共生」

先ず、農林魚業総生産高が年間約十二兆円であるのに対し、廃棄する食料が約十一兆円分にも上ることを話し、『日本社会の歴史は米にある。米作りは農業の本質であり、社会の安定と親子の絆、地域の文化と互惠、災害の防止等、日本人の暮らしには米作りが大きな役割を果たしてきた。現在それが崩れつつある』との講義をしたあと、親たちに農林作業未経験者が多いため、夏野菜の播種・移植・手入れ方法等をまず親から実習して、その後子供たちとの協働作業とした。たとえ一種類でも家族で作ったものを「一緒に楽しみ食べる」ことが普通にできれば家庭の崩壊などはないと指導した。

【その他】

○養護学校支援（卒業後の就業・就職問題）

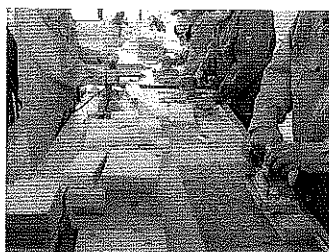
親たちや教師の心配は深刻である。（県の授産施設では、平均給与希望額が月収2万円であるのに対して実質8千円程度） 将来生きる為の収入を得る方策として、農林業を主として・印刷業・食品加工業・インテリア等広範囲な業種の中で子供たちの能力を引き出し、プロの手を加えれば立派な商品と成り得ることを体験し、これは次年度につなぐ計画をしている。また、詳細はあとに述べるが、平成26年からを目安に新産業団地での就労への道を開くことができた。

〈生徒たちの作業風景〉

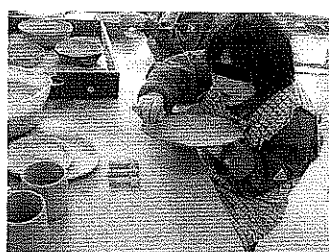
木工



工作



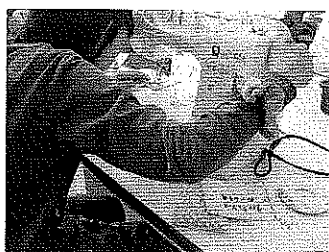
陶芸



陶芸



縫製

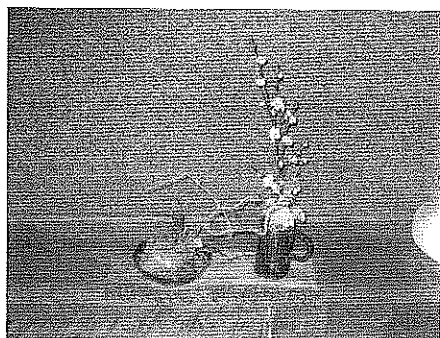


カゴ編み

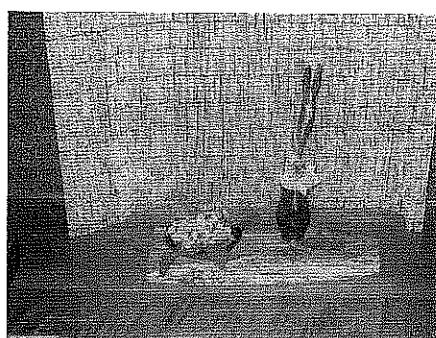


〈それぞれ個性的で味がある生徒たちの作品に花を飾り、商品化のヒントとしたもの〉

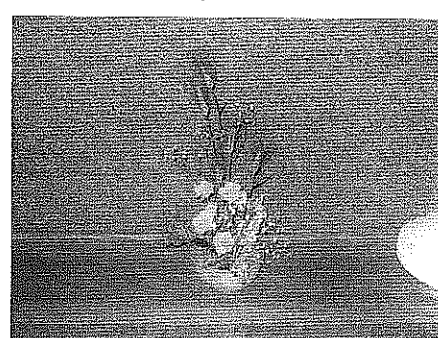
皿とマグカップ



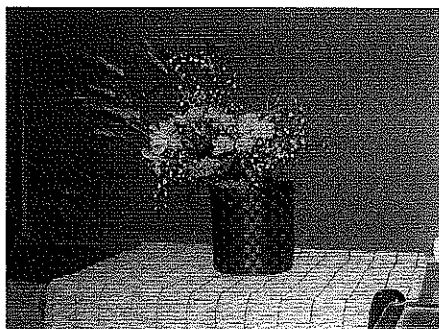
皿と一輪挿し



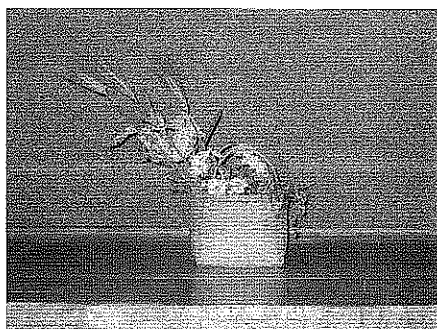
どんぶり



くずかご



手提げかご



バナナハンガーと指導者の作品



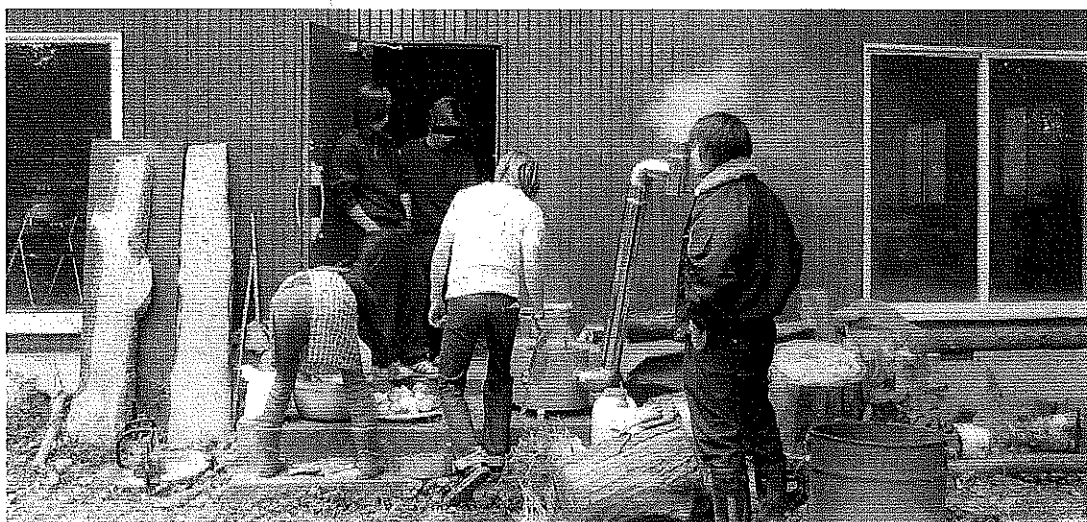
○夏休みの過ごし方意見交換

たのしい新学期を迎えるために、親子が共有できる話題を共通の体験から探すことを提言した。自宅でもできる、鉢植えやプランターで野菜や草花を育てたり、小動物の飼育方法である、特に小学生を持つ親たちに詳しく指導した。母親たちには、朝食は暖かいものを用意し、できるだけ家族と一緒に過ごす時間を作る努力をして欲しいと話した。

○中学生の山小屋での宿泊体験

インフルエンザ流行の為午後10時迄山の夜(ランプ生活)を体験後、宿泊は本部にて。翌朝は6時起床で山小屋に戻り、食事を自分たちで作り早朝の山の魅力を体感させた。

(本来なら早朝4時頃からが良い。)



事業の経過

6月6日・7日 子供用水田の田植え

10日より放課後教室開始

10・11日 授業内容企画・関係者に業務連絡

12日 不登校児童の農作業と自然観察会

13日 親子共同作業で夏野菜の播種と移植

14日 第1回実行委員会開催

(企画検討及びスケジュール・役割担当決定・講習・講演会内容決定)

15日 市役所 事業趣旨説明

16日 県庁 事業趣旨説明と協力要請「生涯学習課・教学指導課」

19日 養護学校 事業内容説明(就職の為の実習について打ち合わせ)

20日 用水観察(水生昆虫や魚類探し)、草刈り

22日 県庁(生涯学習課) 事業内容説明

26日 保護者水田補植(未経験の親たち)

27日 米・野菜の成長観察、川の自然探索生物探し(カニ・ドジョウなど)

28日 夏野菜の手入れ(トマト・ナス・スイカ等) 親子共同作業

30日 ジャガイモ土寄せ

(不登校・非行相談対応は連日)

子ども参加者 延べ61名

教室等実施回数 14回

7月4日 山の散策と親子で創作・手作り昼食会(夏野菜利用)

5日 アレチウリ・セイタカアワダチソウ退治(施設周辺道路) 親子共同作業

7日 不登校生徒 タマネギ収穫(素直であるだけに自信をつけさせてやりたい)

8日 不登校児童 山林散策等

9日 不登校児童 夏野菜の収穫(トマトやキュウリは塩と味噌のみが美味しいことを知る)

10日 不登校児童の川釣り(本能を呼び覚ます指導である)

11日 ジャガイモの土寄せ、タマネギの収穫と片付け

12日 「霜下きゅうり」播種等(マルチ栽培の意味を教える)

13日 事業委託書確認、各委員に連絡

18日 ジャガイモの分配と焚き木集め、イモ煮会

19日 山小屋周辺で遊ぼう・なんでも作ってみよう会(自由な発想で作らせた。男女の違いが明らかで、フジやアケビのツル・マツカサや枝・ドングリ等で作った作品は面白い)

20日 ナノハナ畑耕起(大型トラクターによる深耕)

21日 練馬にてジャガイモの分配と意見交換会

- 25日 ナノハナ畑作り（床作りと肥料撒き）、夏野菜収穫親子共同作業
 26日 第2回実行委員会開催（新型インフルエンザ流行について・夏休みの過ごし方・宿泊体験について等）
 29日 保護者および関係者山小屋見学
 （天候不順による作業日の変更について・夏休みについて等話し合い）
 30日 散策道手入れ山の土の働き学習会（保水力について学ぶ）
 （非行相談6件） 子ども参加者 延べ111名
 7月教室等実施回数 17回

- 8月1日 読書等自由勉強 雨で室内読書、夕方イモ煮会（手分けしてよくやった）
 2日 夏休み自由教室 読書・山遊び（こういう場所では何でも良くやる）
 3日 養護学校 インフルエンザ流行を考慮して当会が学校に出向くことになった。（養護学校生徒の卒業後の就職等について）
 5日 講習会「自然との共生」（自然や農林作業の中では我慢と気配りを憶えることができる。熱中すると作物や家畜の世話を自然に行うようになる。）
 7日 練馬にて地元（小諸）産野菜料理交流会（首都圏参加者親子）
 8日 宿泊体験受け入れ準備
 9日 首都圏生徒の宿泊体験。午後10時までランプ生活体験。インフルエンザ流行の為泊まりは本部とした。雨降りでも子どもはうまく遊びを探す。2階で本を読む者、1階で木工等、その後（午後10時15分ごろ）本部で地元野菜を使って料理と食事会。翌朝は6時起床で早朝の山を楽しみ、朝食も自分達で作った。
 10・11日 農林業体験（用水の草刈りと、用水の役割の大切さを学ぶ）
 12・13・14日 草刈り・山遊び 市街地等見廻り
 15日 首都圏青年水田の畔草刈り（日頃の疲れを農作業で解消）
 16日 首都圏親子自然観察・山菜取り等（父親が1日一緒に行動したことも良かった）
 21日 秋野菜の播種床作り（野沢菜・大根マルチがけ）
 22日 保護者の為の講演会「子どもの深層心理」（非行・不登校生徒の家庭相談）
 23日 ナノハナ畑耕起(大型トラクター) 床作り
 24日 夏野菜収穫と不登校相談（親子の時間のすれ違いと父親の接し方について）
 25日 工作用の材料下ごしらえ
 29日 首都圏親子の野菜収穫と木工工作 親子で作るまな板と花台
 （非行相談4件） 子ども参加者 延べ104名

教室等実施回数 20回

- 9月1日 台風見廻り
- 5日 野沢菜・大根播種
- 6日 グループ体験活動(山林・畑・乗馬・家畜の手入れ等) 子ども31名
5人グループで活動。良い体験ではあるが真の指導ができない。
(20人くらいが適当である)
- 7・8日 不登校児童家族の農業体験と相談(親子で楽しく行うことが大切)
- 9日 布施川での遊び・観察・相談(川での子どもは生き生きしている。清掃も楽しくやっている)
- 12日 読書・創作・午後10時までランプ生活体験(雨の夜山小屋でのランプ生活体験は怖かったらしい。午後10時で終了)
- 13日 木工創作・イモ煮会
- 15日 小中校長会長とインフルエンザ流行等について
小諸佐久地域についても学級・学年閉鎖が徐々に広がっている由。受け入れに注意が必要。
- 19日 ナノハナ畑づくり 肥料撒き、播種、中型トラクターで覆土
- 20日 首都圏親子の稲と野菜の観察、夏野菜収穫
(子どもがゲームに熱中しすぎて困るとのこと)
- 21日 グループ農林体験活動(中学生26名、6グループで農・林・牛馬・皆の昼食作り等に分担する。保護者の手助けも良かった)
- 26日 野沢菜・大根等間引く
- 27日 ナノハナ発芽観察、シイタケ採り(シイタケは子どもの顔の大きさほどもあり、それぞれ分けて持ち帰った)
- (不登校相談11件:夏休み後は多い) 子ども参加者 延べ121名
教室等実施回数 14回

- 10月3日 野沢菜等育成状況観察(本葉の生育を調べる)
- 4日 第4回実行委員会(9月までの事業検証)
- 6日 台風対策
- 9日 養護学校 生徒の風邪による日程変更について
(屋外体験をやめ当方からの出張と参観に変える)
- 10日 「稲の種類の違い」学習(コシヒカリとあきたこまちの違いを学ぶ)
- 11日 首都圏子どもとの稲刈り体験(2時間で慣れる「あわてず急がず」で指導)
- 17日 稲刈り体験と高齢者との交流会(高齢者との付き合いで気の遣い方を学ぶ)
- 18日 ナノハナ間引き・シイタケ採り
- 24日 自然と共生する菌類・植物観察(木に絡むツルの退治を通して共生しないものもあることを学ぶ)

- 25日 自由創作（巣箱・本立て・花台・犬小屋等）（非行少年とは到底思えない素直さで、これからの指導が楽しみである）
- 29日 練馬にて子ども相談と作業日程について（主にひきこもり生徒の保護者）
- 31日 脱穀とワラ片付け 小中学生（雨で湿ったもみの脱穀を教える）
（非行・不登校生徒相談5件）
- 子ども参加者 延べ74名
教室等実施回数 12回

- 11月1日 環境貢献作業 布施川ゴミ拾い（皆楽しそうに作業した）
- 3日 ナノハナ育成状況観察
- 7日 夏野菜畑の後始末とトラクター耕起
- 8日 シイタケ採り、体験発表会(安全な食べ物について)
- 12日 養護学校で就職問題について（卒業後の就職状況の厳しさ）
- 13日 大手企業役員と対談。若者（養護含む）の就職問題について企業側の話聞く
- 14日 ナノハナ間引きとシイタケ採り
- 15日 農業体験 タマネギ植え付け（小学生向きな作業で、丁寧に植えた）
- 21日 大根収穫と室の作り方を教える
- 22日 首都圏ニート青年と、農業について（なまじ知恵が多く実践させるとすぐに息が上がってしまう。頭より体を使い流れる汗をかけと指導、体験させた）
- 27日 木工材料運び
- 28日 研究会「山の手入れと防災」森林組合と協働して危険箇所の選別間伐を行う
- 29日 第5回実行委員会(病気と切れる子どもの食生活について)
- 子ども参加者 延べ48名
教室等実施回数 13回

- 12月2日 シイタケ用原木下見
- 5・6日 収穫祭及び文化祭（参加者親子で互いに作品を見るその後子ども水田の米と取れた野菜キノコで食事会）
- 12・13日 野沢菜取りと漬け方体験（中学生には良い体験となった）
- 14日 問題生徒について（本来親が家庭で指導できるような細かいことまで教師に相談してくる。親の自信の無さが良く分かる）
- 19日 創作しめ縄作りとワラ細工（ワラぞうり）
- 20日 探鳥会（冬の山林は野鳥が多い特にホウジロやキジ、ヤマドリを良く見る）
- 26日 山小屋掃除
- 27日 第6回実行委員会(インフルエンザと危機管理について、正月休みについて)

- 29日 暮れの市街地見廻り
農機具・木工道具類手入れ
30日 ナノハナ間引き

子ども参加者数延べ53名
教室等実施回数 12回

- 1月1日 探鳥会（首都圏の家族が雪の山林散策）
4日 文集について打ち合わせ
5日 新年挨拶
8日 教師・保護者・PTA役員等顔合わせ
9日 アカシヤ退治と山林散策
10日 親子で山の散策（ヤママユ・野鳥の巣・蜂の巣さがし）
11日 首都圏住民との体験交流（ニート青年の家族相談）
16・17日 木工作業と雑煮会（親子で作る）
18日 養護学校訪問(キノコホダ木作業日程について)
23日 木工手直しとケモノ道散策
25日 養護学校参観（教頭の案内で各教室の風景を参観する）
26日 首都圏親子冬の山散策（親子体験）

子ども参加者 延べ34名
教室等実施回数 13回

- 2月8日 文集についての打ち合わせ
10日 印刷業者との打ち合わせ
12日 ホダ木切断（キノコの原木）
18日 ジャスコにて 養護学校生徒作品展示即売会
19日 障害者等訓練施設増築について（22年6月から開始の旨県と打合わせ）
20日 文集検討会
23日 障害者雇用についてメーカーとの打ち合わせ
太陽光パネルメーカーと新規雇用について話し合う
25日 ニート訓練施設について（若者自立の訓練施設を作ることに各企業の協力を取り付ける）
27日 木の芽探索等（木の芽のふくらみ具合を見て葉の出る時期を占う）

子ども参加者 4名
教室等実施回数 14回

- 3月3日 次年度活動について（組織の充実を図り雇用に重点を置き、20歳には大人になれる指導をする）
- 4日 文集について打ち合わせ
- 6日 アカシヤ退治
- 9日 文集原稿まとめ
- 13日 事業の検証（今年度は新型インフルエンザの対応に神経を使った。従来は高齢者との交流が多いが今年度は1回のみであった。非行・不登校、ニートと呼ばれる若者の自立には、受け入れる側と親との信頼関係が大切）
- 15日 提出書類の準備（今年度事業終了）

教室等実施回数 7回

（ 21年度教室等実施総数 136回 ）

当会の活動においては非行・不登校支援が多いため、県教学指導課との約定により個人情報保護のために平成17年度よりマスコミ報道および実名や個人が特定できる写真等の掲載はしないこととしている

文部科学省企画公募事業の意義と効果

文部科学省企画公募事業では、18年度は当滴水の会関連団体において「子どもの居場所作り」を実施。19年度「学びあい・支えあい」事業では、主として通学道路の安全安心の為に県と協働で整備を行い、安心道路となって地域住民や学校から感謝されている。また20年度の「地域活性化事業」においては、市街地再生改革構想実現に向けた取組で、1,000分の1の市街地改革模型を作成して、市役所移転及び小諸厚生総合病院の発展的移転計画を企画・提言し、現在小諸市と小諸厚生総合病院が中心となって25年度までに完成の予定で取り組んでおり、県・市当局、市民共に地域医療の充実と新規発展が若者の雇用においても貢献するものと期待されている。このように、文部科学省の企画公募事業を通して当地域の行政との連携を強化し、且、互いの能力発揮に大きく寄与することができた。

今年度事業では新型インフルエンザの対応に苦慮したが、行政・学校・養護学校との連絡を取りながら対応したことで、多少の日程の変更や人数制限等はあったが大事に至らずに済んだ。非行・不登校の児童生徒の支援・養護学校の支援も当初計画以上に成果が上がった。しかし昨年よりも地域の不安定要因は多く存在し、家庭や子供たちに大きく影響していることも厳しい現実としてある。子どもは正直で、家庭に悩みがある場合顔や態度に表れる。ここ十数年来の社会の変動について行けない家庭も多く、例年にも増して雇用に不安のある家庭を支援する必要があった。相談があれば地域外でも引き受け、親の就職の世話も十数件は決めたがなかなか容易ではなかった。

地域の未来を考える上で、青少年の健全育成は基本問題であり、地域の継続的発展の基礎作りは教育にある。これは4年間にわたって文部科学省の企画公募事業を実施してきた経験をとおしての実感である。そのためには「医」「食」「住」「労」「教」の環境を整えなければならない。そこで、当事業実施の中で、メーカー（異業種数社）、JA、県・市行政機関、教育関連機関からの来訪者と雇用の安定について話し合い、その結果〔新産業団地の構想案〕がまとまり、地方行政との協働で計画書作成段階に入ることができた。本案は地形と地の利を生かした産業団地の構築で、200人以上の雇用を見込み、25年度中に完成させ地域の安定化を図る計画である。将来、一般児童生徒及び養護学校生徒の卒業後の就労にも道を開くことと期待されている。